

モンゴルの遊牧的牧畜～動く生業様式への支援

2003 年 4 月より開発調査の一員としてモンゴルのゴビ地域へでかけている。社会変革や自然災害の波に揺れる当該地域の牧畜業体制を見直し、その改善ならびに支援を多角的に検討する業務であり、なにより筆者にとってはシリアにおけるアラブ系牧畜民バッガーラ族とのつきあいにつづいてユーラシア大陸の牧畜民にふれる格好の機会となった。

モンゴルは 1990 年代にはいり社会主義の計画経済体制が崩壊した。それにもないネグデルと呼ばれる集団農場が解体されて牧畜民による家畜の個人所有が認められた。市場経済体制下で家畜頭数は急激な増加を示し、失業率の増大に呼応するかたちで牧畜民世帯数も上昇してきた。他方、ネグデル・システムのなかで維持・管理されてきた井戸をはじめとするおおくの給水施設がこうした混乱期に消失した。さらに、社会主義時代に手厚く実施されていた牧畜民に対する支援サービスもなくなり牧畜民の生活はおおきくさまがわりしつつある。

さて、上述の政治・経済体制の移行にともなう牧畜民社会の激動はもとよりモンゴルではさまざまな「動き」を感得することができる。まず降水量の年次間の振幅が大きく、草の生産量も降水量の多寡に作用されたえず変動している。また遊牧的牧畜は生業類型としてとらえれば、定住的農耕とおおきく異なり、移動を基本としており耕作をおこなわず固定家屋を必要としない。しかし、「動く」牧畜形態である遊牧的牧畜は近代国家による定住化政策等で徐々にその伝統的な姿を消してきた。こうしたなかモンゴルにおいて、自然条件の特異性があったとはいえ、遊牧的牧畜が旧ソ連の社会主義の影響による変容をこうむりつつ現在にいたるまで連続とつづけられてきたことは驚かざるをえない。

降水量の寡少と変動という乾燥地特性にくわえて、厳冬期の寒冷というきびしい気象条件のなかでモンゴルの牧畜は営まれている。気象条件のきびしさは、草原の植物生産の低生産性と不安定性をうみだしている。ましてやゴビのような土地では、農耕を持続的かつ安定的に営むことは可能性が皆無ではないにせよ、ほとんど無謀な企てであろう。牧畜民は家畜群とともにみずから動くことで草原の低生産性ないし不安定性をたくみにおぎない克服してきた。季節的・地域的に偏在するけっして豊かとは言えない草資源を有効に獲得するため、ゴビでは動くことが決定的に重要であるとおもわれる。ぎやくに、牧畜民の動きがあるからこそ稀少な草資源が豊かに維持されてきたとも言うるのであろうか。顔は日本人と似ていても、必ずしも日本が蓄積してきた農耕の技術や思考方式が直接通用しない「動く」相手と向き合いながら、市場経済化の渦のなかでのモンゴルの遊牧的牧畜の将来像を模索している。

(ドルノゴビ県サインシャンドにて：古賀)



ゴビのフタコブラクダ



残雪の春営地



疾走するアジアノロバの群れ